

ゴボウ根腐病に関する研究

(第8報) 寄主植物について

富来 務・藤川 隆・佐藤俊次・安藤俊二

(大分県農業技術センター)

本病原菌 (*Pythium irregulare* BUISMAN) については、BUISMAN (1927) の報告が最初のものであり、寄主はキュウリ、ルーペン、エンドウなどがあげられているが、わが国ではじめてゴボウで発生が記録された。そこで1971～77年に、本菌の各種植物に対する寄生性をするため、主として新葉に対する接種試験を行った。供試植物は春期の発芽直後または新鮮な葉を無消毒のまま用い、一部は果実、葉柄、莖、根部などを用いた。いずれも直径9cmのペトリ皿にいれ、殺菌水を注いで萎凋を防ぎ、ついで馬鈴薯寒天平面培地で2～3日間培養した本病原菌の第5号菌の菌糸切片を数箇所接種し、25℃においた。1回に数葉を用い、2～3回反復した。結果は7～14日後まで観察し無接種区と比較した。発病は2

～3日後より油浸状病斑を形成した。その結果は主として日本有用植物病名目録により、野菜、果樹、食用作物、特用作物、観賞植物、林木および牧草と、さらに雑草に区別して第1表に示した。

第1表に示すように、野菜ではゴボウの外、キュウリ、トマトなど計15種類、果樹はナシ、ブドウ、ウンシュウミカンなど9種類、食用作物はサツマイモなど4種類、特用作物はクワ1種類、観賞植物ではペゴニア、モクセイなど16種類、林木はニセアカシヤなど4種類、雑草はアカザ、ハコベなど7種類に寄生性をみとめた。すなわち91種類の植物に接種した結果、56種類に寄生性をみとめ、かなり多犯性菌であることが判明した。従ってこれらの寄主植物については十分注意する必要がある。

第1表 ゴボウ根腐病菌の寄主植物 (1971～77)

事項 区別	人 工 接 種 試 験 結 果		
	十 (中～多発病)	十 (少発病)	一 (無 発 病)
野 菜	ゴボウ(根、葉柄、葉)、キュウリ(葉、莖、果) プリンスメロン、トマト、ピーマン(葉、果)、 ニンジン、スイカ(葉、果)、カボチャ、イ チゴ(果)、ナス、カンラン、オクラ、パセリー	ニラ、シソ	サトイモ、イチゴ(葉)、セルリー、ネギ、 ミツバ、ヤマノイモ、ミヨウガ
果 樹	ナシ、ブドウ、ウンシュウミカン、クリ、 ウメ、イチジク、ユスラウメ	カキ、モモ	—
食用作物	サツマイモ、ジャガイモ、ソラマメ	ダイズ	イネ
特用作物	クワ	—	タバコ、クス
観賞植物	ペゴニア、モクセイ、ゲッケイジュ、ヒイ ラギナンテン、ヒイラギ、ライラック、ハ ナズオウ、クコ、パチュニア	サザンカ、イチヨウ、 サクラ、サツキ、キヨ ウチクトウ、クロマツ クロガネモチ	リンドウ、ホオズキ、マサキ、アジサイ、 ユリ、レンギョウ、ボタン、ザクロ、ムク ゲ、ハイビスカス、ツクパネウツギ、オウ ゴンシノブヒバ
林 木	ニセアカシヤ、ニレ、イヌビワ	モッコク	サンゴジュ、アカメガシワ、イタヤカエデ サンショウ
牧 草	—	—	シロツメクサ
雑 草	アカザ、ハコベ	セイタカアワダチソウ ヨモギ、アレチノギク ハルタデ、タンポポ	イヌガラシ、ヨメナ、ツユクサ、イヌビユ カラスビシヤク、ギシギシ、メヒシバ、ヒ ルガオ、イヌビエ

備考 植物名は主として日本有用植物病名目録により、その他、牧野富太郎、宮沢文吾氏などの図鑑によった。